

助辭編(一) 助詞

編集
鈴木一彦
林巨樹

編集
協力
飯田晴巳
猿田知之
中田緑朗

明治書院

編 者

鈴木 一彦 (すずき かずひこ)

林 巨樹 (はやし おおき)

研究資料日本文法

第5巻 助辞編(一) 助詞

創業88周年記念

特別定価 2,800円

昭和59年3月25日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町 1-16

電話 東京 (292) 3741 (代)

振替口座 東京 3-4991

© K. Suzuki 1984 3381-26605-8305 製本 星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辭論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにつとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を辿ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実し、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木 一彦
林 巨樹

目 次

1 助辞とは何か

吉田金彦 1

一 まえがき 2

二 学校文法から大槻文法に溯る 4

三 近代初期の黒川の苦悩 6

四 助辞に対するさまざま扱い 10

五 助詞における動と静の分別 13

六 松下大三郎の教科書文法 16

七 松下文法の助辞研究 19

八 語の分類における助辞の位置 22

九 漢語と歌学に伴う助辞研究 25

一〇 むすび——助辞のアウトライン 27

2 膠着語とは何か

柴谷方良 33

一 はじめに 34

二 言語タイプとしての膠着語 34

三 膠着語における綜合度の違い	36
四 膠着語のシンタックス	38
五 史的展望	48

3 助詞の分類

坂 梨 隆 三

一 はじめに	54
二 大槻博士の分類	57
三 山田孝雄博士の分類	60
四 橋本進吉博士の分類	79
五 時枝誠記博士の分類	84
六 その他の分類	90
松下大三郎博士の分類	
中等文法における分類	
渡辺実博士の分類	
七 おわりに	98

4 係結びについて

仁 田 義 雄

一 はじめに	102
二 係結び研究史瞥見	104
宣長以前	
本居宣長の係結び研究	
宣長以後	
山田孝雄及びそれ以後	

三 係結びとは	121
---------	-----

係結びの作用するレベル 係結びと文の伝達類型

5 助辞の研究史	137
----------	-----

一 助辞とテニヲハ	138
-----------	-----

二 和歌・連歌および伝統的テニヲハ研究	141
---------------------	-----

和歌・連歌とテニヲハ 『手爾葉大概抄』・『手爾葉大概抄之抄』

『てには綱引綱』 『古今集和歌助辞分類』 「姉小路式」 『春樹頭秘抄』

『春樹頭秘増抄』・『和歌八重垣』 『和歌童翫抄』・『歌道秘蔵録注釈』

『氏邇乎波義憤鈔』 『和歌手尔於葉見聞私録』 『一步』

『和歌具竹集』

三 テニヲハ研究の新傾向	160
--------------	-----

『てにをは紐鏡』・『詞の玉緒』 『あゆひ抄』 『あゆひ抄増補』

『言語四種論』 『詞玉橋』 『助辞本義一覽』 『てにをは係辞弁』

『言霊のしるべ』 『語学新書』

四 国語学と助詞研究	181
------------	-----

大槻文彦 山田孝雄 松下大三郎 橋本進吉 時枝誠記

6 助詞の諸問題	197
----------	-----

一 問題点の概観	198
----------	-----

二 「が」と「は」の問題点	201
---------------	-----

佐藤 宣男

山田 みどり

三 「ので」と「から」の問題点	208
四 今後の課題	211

7 方言の助詞——奄美諸方言の名詞の曲用にみる問題点

松本泰 丈⁽¹⁾ 244

一 はじめに	243
--------	-----

二 語形のつくりと意味	243
-------------	-----

標準的でない接辞の共存 語幹との融合化 接辞の重義性

三 曲用体系の問題点	233
------------	-----

接辞ゼロのかたちの地位 連用形式と連体形式 基本的な語形とその

他の語形 助辞の用法の問題点いくつか

四 文法化・虚辞化	224
-----------	-----

五 おわりに	214
--------	-----

資料Ⅰ 近世以前の助辞研究書抄

〔飯田晴巳〕 246

袖中抄(抄) 八雲御抄(抄) 悦目抄(抄) 愚秘抄(抄) 手爾葉大

概抄之抄(全) 姉小路家手爾葉伝(全) 春樹頭秘抄(抄)

資料Ⅱ 助辞関係研究文献一覽

〔飯田晴巳〕 326

1 助辞とは何か

吉
田
金
彦

一 まえがき

「助辞とは何か」という問いである。「助辞とはこれこれだ」と答えられたとしても、それはその時の大体の考えであり、したがって、ある程度主観性をまぬかれえないその人の認識の結果を示す現状に外ならない。だから、すべての学問においてそうであるように、およそはじめに言わなければならないはずの《定義》なるものは、目標への仮の命題であるにすぎない。定義はたえず結果の検証によって、くり返し補訂されてゆくべき宿命を負っている。

考えてみると、《助辞》という用語は、このところ、しばらく耳にすることが少なかったような気がする。近年の諸家の文法書を見ても、ご本人自身のことばとしての助辞には、あまりお目にかかれない状況で、辞書などの記述においても、それは一般に控え目であったように思われる。

『国語学辞典』（旧版、昭和三〇年）では、《助字》が漢語学のものとして立項があるものの、『国語学大辞典』（新版、昭和五五年）ではそれが消え、本文中の記述で触れるにすぎず、『日本文法大辞典』（昭和四六年）では《静助辞》《動助辞》が上っているけれども、説明は至って簡単であって、とくに国語としての《助辞》はない。また、『国語学研究事典』（昭和五二年）でも研究史や書名に関して触れるばかりである。

そういう状況であるから、それでは《助辞》なることばは、現在あまり有用でないかというに、そうでもない。現に今、本講座では体言編や用言編と並んで、助辞編が編集され、助辞編には助詞と助動詞とが配されている。その按排でもつてみると、名詞や代名詞などの総称に体言があり、動詞や形容詞の総称に用言があるように、助詞や助動詞の総称として助辞があるのだ、という理解もあるであろう。助詞と助動詞とを合わせて呼ぶ称呼には、体言や用言などが自立語とか独立語とか呼ばれるに對して、《助辞》は付屬語とか付屬辭とかで通っている。また、《詞》に對して

《辞》ともいわれているのは、周知の通りである。

しかし、助辞とか辞とかの名前は、単に総称のための便宜や、分類上の都合だけで持って来られた呼称にすぎない、とは言い切れないものがある。いやむしろ、助辞や辞という用語には、もっと深くこだわってよい考えがあるはずである。それには、国語学史をひもといても分るように、助詞や助動詞の用語のはるか以前から、古くて長い用語の歴史を持つことばなのであったことから考えられる。

この際、「助辞とは何か」を問い直すことは、単に助詞・助動詞を合称してその概説を述べるといふだけのことでないであろう、と理解する。

思うに、助詞・助動詞をめぐる、そこから品詞全般への問題が提起されて久しい。品詞論への反省が構文論を誘い、構文論の発達はまた次の段階での形態論を刺激するという具合に、新たな文法研究一般への問題意識にも通じる問題である。単語とは何か、品詞分類は何を意味するのか。われわれの研究目標は文なのか、語なのかなど、おおげさにいえば、それはおよそ国語研究の永遠の宿題として、ゆるやかにかつ大きくたえず繰り返される根本的命題でさえある。

とすれば、「助辞とは何か」に答えるには、国語における付属辞の研究の歴史を、振り返るのが近道であろう。助辞そのものの歴史を知るためにも、助辞研究史に目を注がなければならないのは当然のことである。

しかし本講座では、すでに助詞や助動詞についての研究史は別に予定されていることでもあるし、限られたスペースでその全容に触れることも適当とは思われないので、概略の必要範囲内に留め、《助辞》の用語をめぐる規定について考え、その範囲の及ぶところを分類して内容となるべき語をあげてみたいと思う。私にとっていちばん興味あるテーマではあるが、品詞分類も合わせ考えねばならぬ困難な問題であって、ある程度の主観に傾き、かつ謙虚に、妥協的にならざるをえないことを、あらかじめ告白しなければならない。

二 学校文法から大槻文法に溯る

今日の学校文法では、文法事項（ことばのきまり）で教えることは、文の成分五部と、品詞の別十部内外である。体言・用言という語も、自立語・付属語という語も中学校の現代国語には用いられ、品詞は、

自立語……名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、連体詞、接統詞、感動詞

付属語……助動詞、助詞

の十品詞である（名詞から代名詞を出す本、また数詞を出す本もあって、多くても十二品詞どまり）。十品詞にするのは古く文部省国語調査委員会の『口語法』（一九一六年）でもそうだが、これには代名詞・数詞があげられ、代りに形容動詞・連体詞がない。そして助動詞・助詞があることには変りがない。

学校文法に貢献した橋本進吉は、

詞……動詞、形容詞、（名詞）、（代名詞）、（数詞）、副詞、副体詞、接統詞、感動詞

辞……助動詞、助詞

と分類された十一品詞だが（ただし名詞・代名詞・数詞は括弧に入り体言でまとめてあるから大きくは九品詞。『国語法要説』一九三四年）、それより古く大槻文彦は、

名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接統詞、互爾乎波、感動詞

の八品詞に分類し、明治中頃、普通に行われていた体言・用言・助辞の三大分類を採用されなかった（一八九七年『広日本文典』『日本文典初歩』）。大槻は〈助動詞〉を立項しながら、一方の助詞はテニヲハという従来の慣行にしたがって、テニヲハのまま一品詞とされたのである。

明治三十年ごろまでに、すでに〈助詞〉という術語は用いられていた。それにも拘らず、助動詞の方はこれを採用しなかったのは理由があったようだ。当時の助辞には、体言・用言以外の語がすべて包括されており、そういう助辞や助詞を品詞分類における他の名詞や動詞などと並べて、狹義の用語として当て込むわけにはゆかなかった、というようなことが第一に考えられる。もう一つの理由は、

衆語ヲ先ヅ体言、用言、助辞ト大別スルコト悪シキトニハアラネド、此ノ概別ニテ能事^{ノミ}アルベキニアラズ。必ズ復タ其ノ下ニ、小別（八品詞）ヲ立テテ、更ニ詳説セズハアルベカラズ。然ルトキハ、先ヅ体、用、助に大別シテ説クコト、何等ノ必要モナキヤウニテ、徒ニ一ノ煩ヲ設クルニ過ギザルベク、初ヨリ直ニ八品詞ヲ各独立ニ説クコト却テ甚ダ簡明ナルヲ覺ユ（『広日本文典別記』三四頁）

という文面でも明らかのように、学校における文法教課用への配慮があった。詳しくいえば煩雑になるから、それらを避けて品詞一本で説いたのである。

また大槻は、単語を名詞とか動詞とかの八品詞として〈詞〉の字を当てるのは妥当ではなく、体言・用言などの〈言〉の方が正当である、というようなこともこわっている。このように学習の便を考え、状況にも妥協した点が、後世批判の対象となった学校文法の、源流になるところなのである。

大槻は三爾乎波を定義して、

其形多クハ短小ニシテ、且独立シテハ用ヲ成サズ。而シテ言語ノ中間ニアリテ上下ノ語ヲ承接連絡シ、互ニ呼応シテ、其ノ意ヲ通ジ、他語ノ方向ヲ示シ、意義ヲ導キ、自他ヲ區別シ、彼此ヲ分合シ、言語ノ位置顛倒ストモ、其所在ニ就キテ、指示ノ任ヲ尽スナド、関節ノ筋ノ如ク、門戸ノ枢ノ如シ（『広日本文典』一八九七年）
 といい、またこれを簡単にして、

一つの語の下に付きて、これと他の語との関係を言ひあらはす語なり（『新日本文法教科書』一九〇四年）

とも言っている。そしてテニヲハを分類して、

第一類……名詞にのみ属くもの（ガ、ノ、ツ、ニ、ヲ、ト、ヘ、ヨリ、カラ、マデ）

第二類……種々の語に属くもの（ハ、バ、モ、ゾ、ナム、ナモ、シ、コソ、ダニ、スラ、サヘ、ノミ、バカリ、ヤ、カ）

第三類……動詞にのみ属くもの（バ、ト、トモ、ド、ドモ、ニ、ヲ、ガ、テ、（ニテ、トテ、シテ、ニシテ、トシテ）、デ、ツツ）

のように三種に区分している。このような分類は金沢庄三郎『日本文法新論』（一九二二年）などにも受け継がれ、テニヲハという名称こそは古いが、内容とする所は現今いう助詞だけに限られているのは、名目をすてて実質をとった一つの前進であった。内容がこのように整理されてくると、かつて中・近世においてかなり自由に広義に使用されていた手爾乎波の意味するところとはうって変り、それだけに呼び様が変調であるとして、やがて手爾乎波は他品詞に右へ倣えして助詞と改称されるに至ったのである（芳賀矢一らの影響）。学校文法としては、やむをえない歴史の流れだったように思う。

三 近代初期の黒川の苦悩

このようにいうと、いかにも学校文法を是としているようだが、当時の他の諸説に比べてみて理があったということである。

ここで当時の状況を振り返ってみよう。

明治時代（十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて）の国文法は、かなり動揺していた。品詞分類はもちろんのこ

と、助詞・助動詞などの取り扱いが、人により本により、それぞれ異なっていた。

例えば、黒川真頼の『日本文典大意』（一八七二年三月）では、詞を三品（名詞・動詞・助詞）と九品（名詞・数量詞・代名詞・形容詞・動詞・助詞・副詞・接続詞・投入詞）との二段構えで説明し、三品が分れて九品になるとした。そして助詞は「一切の詞を受けてその意を助くる詞なり」として、三種すなわち、

一、法の本となり格を表す助詞（ハ、モ、ガ、ノ、ニ、ヲ、コソ）

二、法の結末となつて語意を終えしむる助詞（セリ、タリ、ズ、ム、ヲハンヌ、ベシ、ナリ、タリ、マジ、〔尊敬〕待ル、候、御座候、マス、マシヤウ、マセヌ、ゴザル、ゴザロウ、ゴザラス、〔命令〕ヨ、ベシ）

三、語意を続ける助詞（①直に続ける詞 バ（風吹かば）、テ、バ（風吹けば）、ド、ドモ、〔形状を表す〕ナガラ、へ、ヨリ、カラ、マデ、ノミ、バカリ、②断えたるを続ける詞 ト、トモ、トハ、ナド）

をあげている。この助詞という中には、いわゆる助動詞や敬語の補助動詞も含められており、すでにあげた大槻分類以前の姿である。

ところで、右の書から半年後の『日本小文典』（一八七二年一〇月）に至ると、九品は一品増えて十品となり、助詞の中から係詞というのを取り出している。これは半年間に黒川の研究が進んだことを示すもので、助詞の三分類もすっかり内容を一新している。すなわち、

一、名詞の助詞（ナガラ、ガテラ、タリ、セリ、へ、ナド）

二、動詞の助詞（動詞の活用段を受けるもの、五種）

① 動詞一階助詞（ズ、ザリ、ジ、デ、ム、マシ、ナム、バ）

② 動詞二階助詞（テ、タリ、ツ、ツツ、ケリ、ケム、ナム、ニ、ヌ、キ、ソ（ナ……ソのソ））

③ 動詞三階助詞（ラム、ラシ、ベシ、メリ、マジ、カシ、ヤ、ナ（詠嘆）、ナ（制止）、ヨ、ナリ（詠嘆）、ト、

トハ、トモ)

④ 動詞四階助詞 (カナ、ヨリ、カラ、マデ、ノミ、バカリ、ダニ、スラ、サへ、ナリ、ゴトシ)

⑤ 動詞五階助詞 (バ、ド、ドモ、カシ、ヤ、ナ (詠嘆))

⑥ 動詞一階及五階助詞 (ヨ 「行けよ」は五階のヨ、「見よ」は一階のヨ)

三、名詞動詞兼受助詞 (カナ、ヨリ、カラ、マデ、ノミ、バカリ、ダニ、スラ、サへ、ナリ、ゴトシ) (この項は説明文は省略されていて、一覧図だけに掲げられている)

の如くで、一步の前進が見られる。二はいわゆる助動詞だが、前に上った敬語の補助動詞など省いているのは良い。動詞との接続に著目したのも良かったが、しかしやはり助詞と助動詞との区別ははっきりしていない。ただ注目されるのは、これら助詞の中から「係詞」というものを取り出し、「ものを定めて言はむとすれば、定むる係詞を用ゐ、疑ひて言はむとすれば疑ふ係詞を用ゐて、それを下にて結びとむるを結詞と云ふ」として、係詞に三種を分ったことである。その三詞とは、

一、右条係詞 (ハ (主)、モ (主)、ガ (主)、ノ (主)、ニ (賓)、ヲ (賓))

二、中条係詞 (ガ (主)、ノ (主)、ゾ (主)、ヤ (主)、カ (主))

三、左条係詞 (コソ (主)、ハ (主)、モ (主)、ニ (賓)、ヲ (賓))

のようなもので、それぞれの助詞が主格か賓格かを示してある。そして右条のガ・ノ・ニは軽い場合であり、中条のガ・ノは重い場合に用い、左条は命令で重いものを表し、右条のニは然あるもの、ヲは然することを示すと区別した。係結びを説き、語感の軽重で分け、格の觀念を導入している。これらを見ると、後の山田文法に至る前夜の狀態がうかがえる。格助詞ガ・ノ・ニ・ヲが語の軽重によって係詞に入れられ、それが係助詞ハ・モと同じ所に属したりまた二分されたりして、まだ徹底しないものの、さきの助詞からこれらを切り離したこと、文章格として主格や賓格やそ